

世界100人の物語

私はこんな人になりたい

集英社版 日本子どもを守る会 編

《10》 芸術に生きぬく物語

葛飾 北斎 トーベン 柿右衛門 岡倉天心
ロダン 滝藤太郎 タゴール アンデルセン





世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

日本子どもを守る会・編
集英社

《10》芸術に生きぬく物語

・アブラハム・ターナー

●アンデルセン

・アンリ・デュナン

・石川倉次

・石原憲一

・井上哲三

・内村鑑三

・湯生岩子

・エジソン

・エンタール

・大庭源次郎

・大塚敬三

●西宮大次郎

・小宮山子

・尾崎行雄

●桂木重門

・ガガーリン

・岡 海州

●島崎雪村

・新井白石

・三浦 重

・ガリバー

・北里敏三郎

・大塚 均

・セーラー夫人

・金原明善

・カール・マルクス

・堀 原

・吉野忠實

・桂木重

・桂木重

・桂木重

・坂本龍馬

・シャートン

・ジョー・ホルト

・ジョン・カー

・ジェームズ・アダムズ

・シェン・アム

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・ウィリアム・マク

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

・カール・マルクス

世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

会との申合
せにより検印
を省略します

NDC 280
集英社・昭和39年
P260 22cm

第10巻 芸術に生きぬく物語

昭和三十九年二月十日 印刷
昭和三十九年二月十八日 発行

編 日本子どもを守る会

発行者 陶山 貞雄

印刷者 大橋 貞雄

印刷所 共同印刷株式会社

製本所 石毛製本所

本文用紙 大昭和製紙株式会社特濃

発行所

株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二一三
電話大代表(30)三三〇 振替東京 五五五

定価三九〇円

はじめのことば 人間の生命は、子どもを生むことによっていつまでも栄えていく。また芸術を作るこ

とによって、美しい生活の花をさかせ、たくさんの果実を残していくのである。人間はだれでも、子どもの

うちから芸術の種子を持って生まれている。しかし、この小さな種子をりっぱに育てて、色とりどりの美し

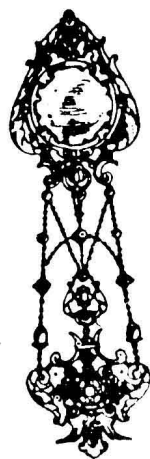
い花を大きくさかせる根本の力は、めぐまれた大分の発見と、一生けんめいの努力というものである。まわ

りの理解と、あたたかい援助が必要である。日本と世界を、芸術の花いっぱいであらう。

もくじ

世界100人の物語全集

《10》 芸術に生きぬく物語



那須辰造

生きているかぎり勉強だ

とうがらし売りをして…… 11

生き生きた絵、ほんもののすがた…… 15

ほんものの富士山を見て…… 17

富士の北斎…… 21

生きているかぎり…… 25

この物語を読む前に…… 9

葛飾北斎の小伝…… 10



運命をねじふせた楽聖

きびしすぎる先生…… 31
母の死…… 34

山本藤枝

は美しきもの
 勝利……40
 ハイリケンシユタツトの遺書……45
 絶望の底から……51
 仕をわすれ、夜をわすれて……55
 なやみをつきぬけて喜びへ……57
 この物語を読む前に……29
 パートーベンの小伝……30

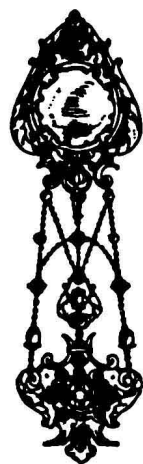


すばらしい赤絵の陶器

かしの葉を生ま出した
 陶工柿右衛門

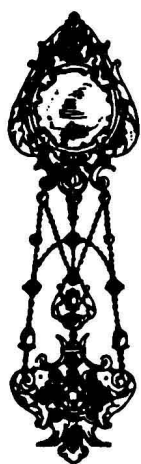
さらば、ふるさと……	37
勝利……	40
ハイリケンシユタツトの遺書……	45
絶望の底から……	51
仕をわすれ、夜をわすれて……	55
なやみをつきぬけて喜びへ……	57
この物語を読む前に……	29
パートーベンの小伝……	30
まねきの手紙……	65
大きなゆめ……	67
意外な相談……	72
変わらぬ決意……	75
苦心二十年……	78
生きている色……	82
この物語を読む前に……	63
柿右衛門の小伝……	64

唐沢道隆



古田足日

夢殿秘仏……………	87
文明開化……………	90
日本発見……………	92
狩野芳崖……………	96
悲母観音……………	102
東京美術学校……………	107
中国旅行……………	111
美校そうどう……………	114
アジアは一つ……………	119
着物を着た国際人……………	123
この物語を読む前に……………	85
岡倉天心の小伝……………	86



まるで生きている人間のように……… 131……富永次郎

近代彫刻の道を開いた人

フランスが生んだ偉大な彫刻家ロダン

苦しい修業……133

カレーの市民と地獄の門……135

カレー市を救った六人の市民……139

真実こそ美の本体だ……141

ロダンはおこらない……145

考える人……147

花子とロダン……149

作品ぜんぶを国に寄付した……151

日本にあるロダン作品……153

西洋美術館……156

この物語を読む前に……129

ロダンの小伝……130



荒城の月

世界的名曲を生んだ滝廉太郎

小林純一

かどで……159

いなかの小学校……160

城あと……162

音楽への道……164

東洋の愛を詩に

ノーベル賞をうけた
日本の詩人タゴール



上野の音楽学校へ……………166

「荒城の月」(1)……………168

「荒城の月」(2)……………171

小さな子どもたちの歌……………173

悲しみの曲……………175

この物語を読む前に……………157

滝廉太郎の小伝……………158

アジアのほこり……………179

少年時代……………179

母の死……………182

国を愛する心……………185

新しい学校……………187

ノーベル賞を受ける……………189

世界の平和を願う……………191

タゴールと少年少女……………196

紙の舟……………196

美しい童話の世界を

デンマークの生んだ童話作家
アンデルセン



チャンハの花…… 198

この物語を読む前に…… 177
タペールの小伝…… 178

かがやく幸運の星…… 201

まずいくつ星の子…… 204

あまやかされたひとりっ子…… 209

くるった祖父…… 212

世界を見に行く…… 221

どろネズミのように…… 225

投げられた救命具…… 233

ひとりぼっちじゃない…… 236

あたたかい救いの手…… 240

詩人への道…… 243

かがやく詩の星…… 246

「童話」が生まれる…… 249

はくしゆの逆輸入…… 250

山本和夫

かざられたオーデンセ市……252

この物語を読む前に……199

アンデルセンの小伝……200

はじめのことば……1

写真口絵

あとがき……255

作家紹介……260

文中の☆は、本文の重要なところを写真図版でしめしている。

装丁 A D 沢田重隆・D 日本書店



生きてゐるかぎり勉強だ 浮世絵の葛飾北斎

江戸（東京）の町に、物売りは大勢いた。画家もたくさんいたが、七色とうがらしを売り歩きながら、職人や芸人やかごかきなど、じぶんの目にとまる労働者のすがたを自由に写生して、生き生きとした絵を作り出したのは、北斎の天分と努力のたまものである。

イヌ、ネコ、家、橋、船など、およそ人間の生活に関係あるもので、北斎の興味をひかないものはなかった。晩年の北斎は、富士山に熱中して、世界的な名画を残している。北斎の絵を見て感心するだけでなく、広く自由に観察すること、深くほりさげて考えることを学んでほしい。

作・那須辰造

さしえ・片岡京二

北斎の小便

葛飾北斎は、一七六〇年（宝暦十一年）下総国（千葉県）葛飾領の、本所（現在の東京都江東区）に生まれた。父は將軍家の鏡師で、北斎は小さいころ時太郎とよばれたが、十九才のとき、有名な浮世絵師である、勝川春草のでしになり、春朗となつた。

北斎はひじょうに変わつていて、奇行で有名だったが、無欲で、正しいことにはじぶんをまげず、はげし

い性質の人であつた。

最初、春草に勝川流の浮世絵を習つたが、その後狩野派や光琳派の絵を習い、南画や洋画も研究し、その手法を浮世絵にとり入れていった。

北斎が、一番強くもとめたのは、ものの真実をえがくことであり、それを浮世絵という版画にあらわすことであつた。五十才をすぎてから、東海道の旅に出たが、富士山の美しさにとりつかれてかいた、代表作の「富岳三十六景」は、多くの人に愛され、今も、深い感動をあたえてい

る。その絵は、自然の明るさ、健康さ、それを発見するおどろきと喜びを、人びとの心によび起こした。

北斎の浮世絵は、明治の初期、日本人が浮世絵をばかにしていたときに、フランスやオランダで有名になり、ヨーロッパの新しい絵の手法にされた。北斎の絵の影響から、ゴッホ、マネ、ドグ、セザンヌなど、近代絵画を開いた人たちが出た。

北斎は、九十才まで長生きし、一八四九年（嘉永二年）に死んだ。

参考図書

改井 菊地 貞 清 編 「北

斎」（集英社）

近藤市太郎著 「北

斎」（講談社）

写真提供

集英社版浮世絵版画「北斎」

とうがらし売りをして

☆葛飾北斎のお話をしよう。

北斎は、浮世絵の絵かきだった。今から百十年あまり前、九十才で死んだ。おそろしく長生きをした人だ。そして、死ぬ少し前ごろまで、力いっぱい絵をかいていたというから、世間によくあるような、よぼよぼのじいさんではなかった。

むかし、東京は江戸といわれていた。北斎は江戸で生まれて、一生、江戸でくらしていた。むこういきの強いちやきちやきの江戸っ子だ。そして一生のうちに、二十いく回も名まえを変え、江戸中のあちらこちらへ、九十回も引っこしをしたということだ。ずいぶん風変わりな人だった。

北斎は、人をあつといわせるのが好きだった。四十才のころ、江戸の音羽の護国寺に大勢人を集め、たたみ百二十じょうほどの広さの紙に、すごくでっかいだるまの絵をかいて見せた。口はウマをくわえられるくらい大き

いし、目玉の中には、人がいくにんもすわれるくらいだった。ほらをふくことのすきな江戸っ子たちも、このだるまには、きもをつぶしてしまった。

また、これとは反対に、一つぶの米に、スズメが二羽飛んでいる絵をかいて、人をおどろかせたこともある。すごく風変わりな人のことを奇人というが、北斎も奇人といわれてもいい人だった。けれども、じぶんの仕事である絵の道にかけては、まじめすぎるほど大まじめな人だった。そして、たいへんながんばり屋だった。

この北斎は、三十才をすぎても、まだ名まえを知られていなかった。三十才になるより二、三年前ごろ、小伝馬町という所の裏長屋の一けんに、おかみさんと、ひどいびんぼうぐらしをしていた。そのじぶん、北斎は春朗とい名まえだった。すごい大男で、やせ細って、骨ばった顔には、高いはながそびえ、おちくぼんだ目には、目玉がぎらぎらと光っていた。着物は、つぎはぎだらけ。あかと絵のぐによごれて、いつ、せんとくしたのやらわからない。

家の中は、もっと、ひどかった。たたみは、ぼろぼろ



葛飾北斎 江戸時代末期にかつや
くした浮世絵師であり、日本画家で
あり、偉大な市民画工であった。

だ。しようじはやぶれてしまっている。天じようから、クモのすがぶらさがっている。この家へ引っこしてきてから二年ぐらいになるのに、一度もそうじをしたことがない。そんな中で、春朗とおかみさんは、平気でくらししていた。春朗は、朝から晩まで、いや晩になっても、せつせと絵をかいていた。

つくえがないから、やぶれだたみの上に、じかに紙を広げている。春朗のすわっているまわりには、かきつぶしの紙がいっぱいちらかっけていて、風がふいてくると、

ほこりといっしょにおどりだす。すみや絵のぐは、かけた茶わんやどんぶりの中にといてあった。そして、その茶わんをあらって、平気でごはんを食べていることがあった。

ときどき春朗は、かきあげた絵をふろしきに包んで、出かけて行った。日がくれるころ、たいていいつも、しよんぼりして帰ってきた。

「おまえさん、絵が売れたかい。」

待ちかねていたように、おかみさんがたずねた。

「売れないよ。」

「こまったね。うちには、もう一文もないんですよ。」

「だって、絵が売れないのだから、しかたがないじゃないか。世間には、おれの絵のわかるやつがひとりもないんだ。」

「負けおしみをいわないでくださいよ。」

「負けおしみじゃない。ほんとうのことを、いつてるんだ。」

春朗は、大きな目玉をぎよろりとさせて、どなりつける。

13 生きているかぎり勉強だ

その声におどろいて、あかんぼうがなきだした。おかみさんは、悲しそうに春朗をにらんだ。

「おまえさん、この子はひもじいのだよ。あたしのお乳がたりないからよ。あたしひとりなら、どんながまんもするけれど、この子がかわいそうじゃないの。」

こういわれて、春朗はだまりこんだ。あかんぼうのなき声を聞くと、じっとしてはいられない。

とうとう、ある日、おかみさんにこういった。

「しかたがない。何か、商売をやってみようか。」

春朗は、何を思いついたのであろう。

それから二、三日たって、

「ええ、とうがらし……七色とうがらし……、とうがらしはいらんかな……。」

と、でっかい声をはりあげて、売り歩く大男があった。

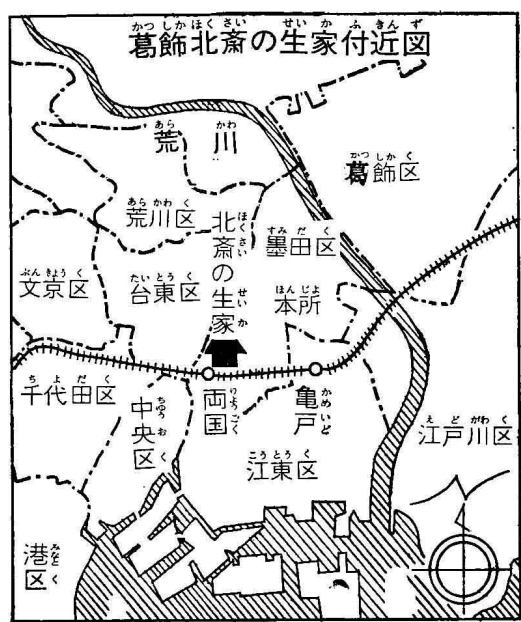
着物のすそを、しりばしよりして、木のはこをかたにかつぎ、ひどくいばったかっこうで、すたすたと歩いて行く。まるで、「買いたければ、売ってやるぞ。」といわんばかりだ。

この、とうがらし売りが、びんぼう絵かきの春朗だっ

た。

でも、一日中売り歩いてみると、よびとめてくれる人もあった。日がくれて、家にもどってみると、どうやら一日ぶんの米が買えるほどのお金が、さいふの中にはいつていた。

こうして一日中働くから、絵の仕事は、夜しかやれない。春朗の家では、すっかり夜がふけても、あんどんの



火がともっていた。春朗は、むちゅうになつて絵をかい
ていた。

ところが半年ほどたつと、この七色とうがらし屋さん
のかせいでくるお金が、だんだん少なくなつてきた。

「おまえさん、どこを売り歩いていたのさ。しっかりと
ておくれよ。今に、この子もあたしも、ひぼしになつて
しまふじゃないの。」

おかみさんは、不平たらたらだ。

春朗は、にがわらいをして頭をかいた。ほんとうのこ
とをいうと、このごろでは、とうがらし売りをなまけて
いたのだ。

春朗が売り歩いていたのは、隅田川に近い町まちだつ
た。そのあたりには、両国橋や永代橋など、中ほどがま
るくもりあがつた美しい橋がかかつていて、しきりに人
が通っている。かごをかついだ男たちが、「えっさ、え
っさ」とかけ声をかけながら、走って行く。橋の下には
屋根のついている船や、荷を積んだ船が、ゆるりゆるり
と、のぼったりくだったりしている。岸には、ヤナギの
えだが風にふかれておどっている。

これを見た春朗は、

（家だって、人だって、ウマだって、イヌだって、橋だ
って、船だって、川の水だって、何一つ絵にならないも
のではないな。これまで、そんなことに気がつかなかった
とは、ずいぶんばかだった。）

と、つくづく感心した。
そして、商売のことなんぞわすれて、一生けんめい写
生ばかりしていたのだ。

こんなちようしでは、とうがらしが、売れるはずはな
い。けれども、写生の紙は山ほどもたまった。糸でとじ
たなら、いく十きつもの写生帳ができそうだった。

春朗は、このときに思った。

（おれの絵が売れないのは、今まで人のまねをしていた
からだ。おれの熱心さがたりないのだ。そうだ、だれの
まねでもなくて、だれにもまねられないような絵をかこ
う。そしたら、きつとひょうばんになろう。

おれは絵かきなだから、絵をかいて生きていくより
ほかはない。）

春朗は、とうがらし売りをやめてしまった。